

埋文にいがた

No. 68

2009. 9. 30

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

平成21年度発掘調査遺跡の紹介

ふる と ろ 古渡路遺跡

(村上市古渡路字海老沢・大場沢字アケ・山の神ほか)

遺跡は三面川と門前川に挟まれた沖積地上に位置しており、調査区の中央部は標高14.5mの微高地で南に向かい標高を低くしていきます。日本海沿岸東北自動車道建設に伴う発掘調査を昨年度から実施してきたところ、中世及び縄文時代の遺構・遺物を検出しました。今回は縄文時代の調査を紹介します。

縄文時代の遺構・遺物は多くはありません。前期から後期に所屬します。

前期末葉には10m四方に土器が集中している場所があり、周囲で小さな穴の痕跡を検出しました。炉跡などは見つかりませんが、建物が建てられていたのかもしれませんが。短期間に人が滞在した可能性があります。発見された土器は写真のとおり、ほぼ完全な形まで復元することができました。金魚鉢のような器形から、東北地方の土器型式、大木6式に比定できます。

中期初頭でも土器集中地点を検出しました。これも明確な掘り込みは見られませんでした。周囲を巡る柱穴の存在や、炉の痕跡と見られる焼土を検出したことから、住居の可能性がります。

中期以降では、長さ約2m、幅約30cm、深さ約1mの細長く深い穴を23基検出しました。いくつかは列状に並んでいました。これらは動物を捕まえるための陥穴と考えられます。これまで同様の遺構は丘陵の崖際などで見つかることがほとんどでしたので、古渡路遺跡のような平坦な沖積地で検出されたことは特筆されます。

中期では埋甕を3基検出しました。土器は倒立した状態で、口縁部あるいは体部が帯状に残されていました。大木8b式と呼ばれる型式で、この時期の埋甕は珍しいものです。

地形的には比較的平坦ですが、住居と推定される土器集中区は、その中でも若干標高が高い部分に存在しています。また、陥穴列は微高地の山裾部分に設けられています。当時の人々が微地形を生かしながら活動していた様子がうかがえます。

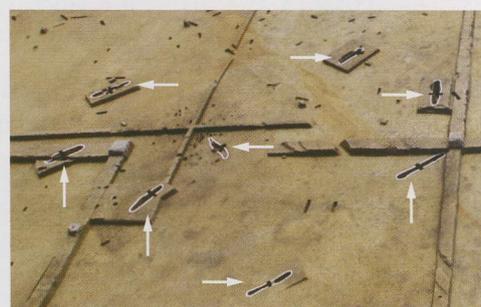
(土橋由理子)



前期の土器



中期初頭の土器集中区



中期以降の陥穴列



中期中葉の埋甕

かな や 金屋遺跡Ⅱ

(南魚沼市欠ノ上ほか)

金屋遺跡は、魚沼丘陵の裾部、庄之又川が形成した扇状地上に立地します。一般国道253号八箇峠道路建設に伴い発掘調査を行いました。本遺跡では、関越自動車道建設（昭和57・58年度）、関越自動車道除雪車Uターン路建設（平成16・17年度）と、過去にも発掘調査を行い、弥生時代に始まり古墳時代・古代と断続的に集落が営まれた遺跡であることが分かっています。

今回の調査では、古代の遺構・遺物が見つかりました。古代の地層を含む旧地形は土石流の影響により大きく削り取られ、調査範囲の中央部を島状に残すのみとなっていました。遺構の大半は、おおむね南北方向に平行に延びる溝で、溝の間隔や方向の類似性から畑作溝と考えられます。出土遺物は土師器が大半を占め、食器の杯、煮炊きに用いる甕、片口（注ぎ口）がついた鉢など日用品が見られます。今回の調査範囲は、金屋遺跡の北端にあたりと考えられ、居住域の外周に畑地が広がる、当時の景観を今に伝えます。



全 景

(尾崎 高宏)

よ かわ なか みち 余川中道遺跡Ⅱ

(南魚沼市余川ほか)

余川中道遺跡は、金屋遺跡の南東約500m、近尾川や平手川が形成した扇状地上に立地します。一般国道17号六日町バイパス建設事業に伴い、5月から発掘調査を行っています。上層(古代・中世)と下層(古墳時代)の2層があり、発掘調査面積は延べ約7,800㎡です。今回は調査が終了した上層の成果についてご紹介します。

中世(15～16世紀頃)では、掘立柱建物・石組み井戸・溝のなど、集落の一部が見つかったほか、鍛冶炉と排滓場(鉄滓などを廃棄した場所)など鍛冶関連遺構を検出しました。県内の同時期の遺跡と比較すると、館や地域の有力者の屋敷地などで鍛冶関連遺構が多く見られることから、本遺跡が有力者の居住地であった可能性も考えられます。

古代(9世紀頃)では、水田の畦畔を検出しました。

畦畔及び水田耕作面は洪水によって運ばれた土砂に覆われていました。水田の一辺は3～7mと、大きさに規則性がなく、形も区画ごとに異なっています。

今後、下層(古墳時代)の調査も合わせ、扇状地の土地利用の変遷・特徴を明らかにしていきたいと考えています。



中世の建物群(左奥)・古代の水田(手前)

(尾崎 高宏)

しもわり 下割遺跡Ⅳ

(上越市大字米岡字中割1,086番地ほか)

下割遺跡は高田平野のほぼ中央に位置し、遺跡の東方を北流する飯田川^{いいたがわ}によって形成された沖積地に立地します。標高は約14mを測ります。一般国道253号上越三和道路建設に先立ち、平成14年度に発掘調査を開始しました。これまでの調査で古墳時代の集落や中世の集落の様子が明らかになり、古墳時代から近世までの人々の活動の痕跡^{こんせき}が認められます。今年度の調査は4回目、6月から10月まで面積6,500㎡を対象に調査をしています。

調査によって、調査区上層の2つの面で遺構・遺物が認められました。第1面では調査区全域で水田を検出しました。水田が現地表から約50cmと浅いことや、地形に高低差がないことから明確でない部分もありますが、水田を構成する畦^{あぜ}、水口、耕作面が見つかりました。全体を眺めると畦の多くは南北方向に延び、畦と畦の間隔が約11mになっています。したがって、古代の条里制^{じょうりせい}の地割りに基づき水田が作られていることが分かります。これらの水田からは中世の珠洲焼や当時輸入された青磁^{せいじ}・青花、近世初期の唐津焼や越中瀬戸焼などが出土しており、陶磁器は15世紀から17世紀前半に所属することから、水田も同時期と考えています。

16世紀末の慶長二年(1597)に作成された『越後国頸城郡絵図』^{えちごのくにくび}には、遺跡のある米岡村をはじめとする周辺の村々が描かれています。同図には米岡村周辺は生産力が高く、上杉氏の直轄地であることが記されています。調査区の全面に整然と配置された水田の数と広さは、それを証明するものと考えています。

なお、上層第2面は奈良時代の遺跡で、現在調査中です。
(高橋 保雄)



中世の水田



出土遺物



全 景

こさか いづけ 小坂居付遺跡

(新潟市南区字小坂居付177ほか)

小坂居付遺跡は鎌倉時代～室町時代(13世紀後半～14世紀前半)の遺跡です。一般国道8号白根バイパス建設に伴い、4月から約3,000㎡について発掘調査を行っています。遺跡は中ノ口川右岸の沖積地に立地し、遺跡が確認できる標高は-0.7m前後です。調査区内は西から東に緩く傾斜しており、東の低地からは当時の水田(畦)を検出しています。また、西側にも水田が広がっていた可能性があります。

遺構 東西の水田域の間には、ほぼ南北に走る微高地があり、ここからは柱根の残る柱穴や杭、地面で火を焚いた跡、溝など多数の遺構が見つかっています。微高地は自然流路(幅約20.0m、深さ約0.7m)のあった所で、上面は凹凸を埋めて整地し、人々が活動しやすくしているようです。出土した遺物の大半は自然流路の埋土と微高地で検出した遺構から出土しています。斎串・人形・鳥形・舟形・刀形などの形代類と大量の箸状・舟形の木製品などが出土したことから、何らかの祭祀を行っていたと考えられます。また、西側水田域と微高地の境には溝が掘られ、片岸に植栽された樹木の根を約2.0m間隔で16本検出しています。配列はほぼ直線ですが、南端で東へ曲がり、更に伸びるようです。また、樹木間とその東西の脇に3条の杭列を検出しています。樹木が植えられた地盤は人工的な盛土で、両脇で検出した杭は土留めの杭と考えられます。樹木は盛土の上に植栽されたもので、用途は今のところ不明ですが、稲架木である可能性が考えられます。

東側で検出した水田耕作土の上には、洪水で運ばれた砂が覆っています。水田は南北方向に走る幅2.0m前後の大畦畔、東西方向の幅0.2m前後の小畦畔で区画されています。確認できた水田1枚の大きさは長さ約10.0m、幅約6.0～8.0mです。また、東西の小畦畔には水口状に切られたか所があることから、標高の高い南西側の水田から標高の低い北東側の水田へと田伝いに水を引き込んだと推測されます。東側水田域と微高地との間にも溝があり、用排水路として利用していた可能性があります。

遺物 土師質土器・珠洲焼・青磁碗などの土器・陶磁器類は浅箱で4箱出土しています。金属製品は、鉄碗や鉄鍋・刀子・鋏・釘・カスガイ・銭貨などです。サケ・マス用の漁具である鉤や刺し網用漁網錘(管状土錘)も出土しており、水田耕作以外に中ノ口川や信濃川を利用した漁も行われていたことが分かっています。木製品は前述した形代類や大量の漆器碗・皿・しゃもじ・下駄・田下駄・横櫛・火鑽臼などが出土しています。木簡が2点出土しており、その内の1枚には「かや」「七月」の文字などと一緒に花押が見えます。同じ新潟市南区大字庄瀬で過去に調査された同時期の馬場屋敷遺跡でも「かや」と書かれた木簡が出土しており、関連性が伺えます。珍しいものでは烏帽子と見られる繊維の痕跡が残る漆膜が複数出土しています。ほかに網代編みの籠と見られるものも出土しています。



近景



樹木の根



中世の水田

小坂居付遺跡は中世の遺跡で、樹木列が稲架木とすれば少し前まで越後平野でよく見られた田園風景を連想させます。しかし、水田の広がりや規模・構造などは分かっていません。現在は農道下の調査を行っており、柱根の残る柱穴も多数見つかり、建物になるか検討中です。今後、木簡の^{しやくもん}積文の検討やこれらの調査結果を総合して遺跡の性格を解明したいと考えています。（佐藤 友子）



鉄鍋出土状況



鳥形・刀形

埋文インフォメーション

第16回遺跡発掘調査報告会は終了しました!

平成21年9月6日（日）新潟ユニゾンプラザを会場として開催した第16回遺跡発掘調査報告会は終了しました。

新潟市での開催であったことから、新潟市内の縄文遺跡についての講演や、当事業団が平成19・20年度に発掘調査した遺跡についてパワーポイントを用いて調査報告を行いました。

当日は312名の方が来場され、一日中、講演や報告遺跡に加えて、近年発掘調査が行われた新潟市の主な遺跡の出土品をじっくり見ていただきました。

今回展示した遺跡は平成22年1月30日から3月22日までの45日間、長岡の新潟県立歴史博物館で、開催する「発掘が語る新潟の歴史2009」でも展示する予定です。皆様のご来場をお待ちしております。



会場の様子



展示場の様子

整理報告遺跡

やま きし
山岸遺跡

(糸魚川市大字田伏字山キシ 863 ほか)

山岸遺跡は新潟県の南西部、日本海から約400m内陸の谷部に立地する遺跡です。北陸新幹線・国道8号糸魚川東バイパス建設に伴い、平成18～20年にかけて延34,780㎡の発掘調査を行いました。

遺跡は縄文時代から安土・桃山時代まで断続的に営まれていますが、中心となる時期は平安時代中頃～鎌倉時代(10～14世紀前半)です。鎌倉時代中頃から後半(13世紀中頃～14世紀前半)の大型の掘立柱建物・庭園遺構・建物群を区画する溝などを検出し、傘紋入り銅製品が出土しており、このころの山岸遺跡は、遺跡の存在する沼川保の地頭で、鎌倉時代には越後を含めた北陸各国の守護を多く輩出した名越氏と関係すると遺跡と推測しています(埋文にいがた57・61・63・66号参照)。

遺跡からは、様々な遺物が出土しており、現在これらの遺物の実測を中心とした整理作業を行っています。写真1～3は山岸遺跡の出土遺物で、年代は一緒に出土した土器・陶磁器などから、いずれも平安時代中頃から末(10～12世紀後半頃)と考えています。写真1は漁網用の木製浮子・管状土錘、一本釣り用の石製錘、製塩土器などの漁撈具です。写真2は把手とその未成品、挽物粗型(ともに木製)、曲物の留め具に使用する樹皮(カバ)など木工に関する遺物、写真3は糸巻きや紡錘車(いずれも木製)といった紡績具です。糸巻きの中には軸を通す穴があけられていない未成品と考えられるものもあります。写真4は遺跡の東端で検出された平安時代末頃(12世紀後半)の水田で、方形を基調としていますが、地形に規制されやや歪な形もみられます。

平安時代中頃から末(10～12世紀後半)の山岸遺跡は、農業のほかに近隣の海や山の資源を多角的に利用した様々な生業を行っていたと推測できます。漁撈・製塩や木工は主に男性が、魚介類の加工や紡績は主に女性が、水田の耕作や稲の収穫は男女共同で行ったのでしょうか。(春日 真実)



写真1 漁撈具



写真2 木工に関する遺物



写真3 紡績具



写真4 平安時代後期(12世紀後半)の水田(西から)

速報 新潟県指定文化財

あお た
青田遺跡出土品(2,076点)

指定年月日 平成21年3月24日

(附 柱根8点・草壁材1点・アスファルト塊2点。赤色顔料塊ほか1点・堅果集積土坑2基)

青田遺跡は、新潟市(旧加治川村)金塚^{かなづか}に所在し、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い平成9年から13年まで発掘調査を行いました。砂丘内陸側の低地に展開する縄文時代晩期末を主体とする集落跡で、川に沿って多数の掘立柱建物や貯蔵^{ちよぞうりつ}穴を検出しました。

土器・土製品・石器・石製品のほか、低湿地^{ていしつち}遺跡であるため、通常の遺跡では、風化して原形をとどめない有機質遺物が良好に遺存していました。またその内容は種類が多く、量の多いことがその指定の理由となりました。

大きいものでは、残存長約5.5mの丸木舟や、舟の操縦に必要な櫂^{かい}も発見されています。また籠^{かご}類・網代^{あじろ}などの編物製品や、赤漆^{あかつし}塗り糸玉・漆塗り櫛^{くし}・腕輪状漆製品などの装身具も目を引きます。黒漆塗り弓などの特別な武器もあり、漆製品やその製作に関わる漆用具の発見も当時の漆技術の高さを知る資料となります。これらの遺物のほか、掘立柱建物の柱根や草壁材などの建築部材が認められることは、当時の住まいの様子を物語る貴重な資料です。

全国的に見ても、これほど充実した有機質遺物群の出土は極めて稀^{まれ}であり、当時の有機質素材の多様な利用法と、それに関わる高度な技術を示しています。



丸木舟



糸玉

たてぐし
櫛かい
櫂くさかべ
草壁

県内の遺跡・遺物66

もとよいた

本与板城跡(昭和63年県指定)

(遺跡所在地：長岡市与板町本与板字荻岩井)

本与板城跡は、与板城跡の北約2km、舌状の丘陵先端部にあります。北側・南側に大きな沢が入り、東に信濃川を眼下に収め、水陸交通の要衝に位置しています。城は自然の地形を巧みに利用し、標高98mの山頂に主郭群を持つ本城地区と、突き出し前要害と考えられる城山地区分けられます。

山頂部は、主郭、二ノ曲輪、三ノ曲輪を一直線上に配置した連郭式の縄張りで、各郭間には大規模な空堀が設けられています。南側には南郭群、東側には小郭群、また主要郭群の周囲には数多くの腰郭があり、防御をより強固にしています。空堀は大規模で要所に設けられています。その掘り方には「箱堀」と「箱矢研堀」の二種類があり、幅は上面で7m～8m・深さ3m～9mと深いものです。また主郭の北80mに径1mと小規模ながら井戸も確認されています。

東方の城山地区には小規模な郭と空堀1条があります。規模が城山地区に比べて小さいことから「前要塞」として築かれたものと考えられています。

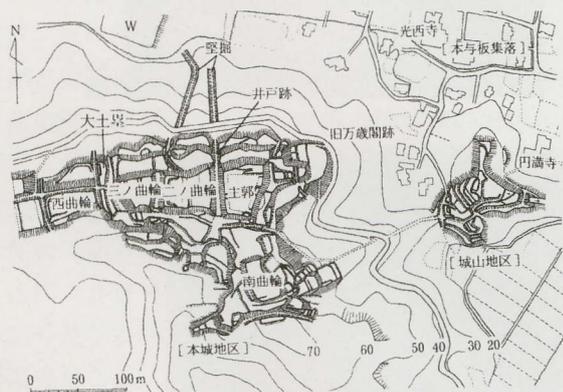
本与板城の築城年代は明確ではありませんが、『温古の葉』によると「建武年間に新田氏の一族籠沢入道が、本与板にはじめて築城した」とあることから、南北朝時代に城の築城を求める説もあります。その後、室町時代に守護上杉氏の重臣飯沼氏が居城したといわれています。史料の上で初めて見えるのは宝徳2年(1450)ですので、60年にわたって飯沼氏が居城としていたと見られます。しかし永正の乱(1514)を境に飯沼氏の名は消えてしまいます。その後、上杉氏重臣の直江実綱が城に入り、信綱・兼続と代々の居城となったと推定されています。



与板城・本与板城の二城跡を東から望む(長岡市与板支所提供)

いつ本与板城が廃城になったかは、史料からは分かりませんが、御館の乱などの緊迫した状況の中で、直江氏が本与板城を修築し、利用したのではないかと考えられています。そして、上杉が会津に移封されるまで存続したものと推測されています。

本城跡は、各郭などの残存状況が良好であり、その縄張りが戦国時代後期の特色をよく残しています。

図156 本与板城跡
(昭海空夫氏原図)

本与板城跡遺構配置図(『与板町史』から転載)

埋文にいがたNo.68

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津 93番地1
TEL (0250) 25-3981
FAX (0250) 25-3986
e-mail: niigata@maibun.net
URL: http://www.maibun.net
印刷 阿部印刷株式会社